新翻夜語

黒

へ13
2701
5止

門へ伊13
新599
ム上

東北帝国大学図書之印

新齋夜語巻之五

八　嵯峨の隠士三光院殿を詰る

三條西内大臣實澄公へ。道遥稱名二公ハ名譽を継ぎ。倭歌の名譽〻〻。文才ハ世〻に並びなくなり。源氏抱撰ハ代〻の業殺〻て。天下の至寶なりと。雲上作園小路枝葉〻〻〻〻。本文出玄ゐて。意味源氏なれば。列聖の先達各注釈をなし。隠れなくを弘り。微なる玄明ゐ〻〻。三条西家も代〻見こたんを高られ。和漢の事跡文書を渉猟まし〻〻實隆公の御説

ハ孟津抄ふるされ。公條公ハ細流抄をあつめ。南門府君も教年御撰味のうへ。父祖御二代の鈔の外ゑ。狩衣明をはじめ。そ名雲井、弦そくろ。晩年ゑ官を辞し。入道法しゝ。濱條の寂室、弦甘んじ。のひ小倉山大井川の辺へ。そゞゝ行通ひ。天龍源川の業義ふ遊び。野宮桂院北芳を見るのあひ。一ハ中院町をよぎり。居家ゝの古墳時雨亭れ。四位ゑ。一見まゝゝ。一れ名居より。南ふ向まて。義合と。いゑあらゝへ。分入らんとゝ。ゆひゝ。山路嶮ゝて。容易登ゞ。ざとられで。扨ゝ傍れ山間ゑ。かゝちばうをむすびさる。茅れ庵のあるゑ。主家やきゝひゑで。あゝゞい七十許

れ男まて。さるゞゝ法師ともゝ。ゝゞ。ひやゝき。朝衣まて居きゝゝ。公れ入まりゑをゝて。敢ゝ。ゝゝきも。なく。脚ゝ。扨ゝ。行やらんやきてるゝれせゝゝ居ゝるを。曳ハいゝる。ゑゝ。ゝる居ゝりと。美ゝれで。かゝる山乃奥ゑ。遁住ゝ。かの地ゝる。ふのゝれ。ゝれ。ゝゞゝ。ゝれきゞゝ人ゑハゝゝとゝ。ゝく。縁ゑ。尻ゝゝひさせゝ。ひゝゝゝやゝ。紀和主乃心ゝる。そのきゝど。若ゝゝゝ。彼地ゝを。ゝゝて。牛ゑ汗ゝる文ゞを。参へ。考へゝるゝつけゝ。いとん。源を車ゝゝ曳ゞゝ。ゝる。ハ。年文斗ゝて。さゝて。麓を。ゝゞゝゝて。家へ。

されどとよ。年月をうきもて足行きども噛くとして後下
を事ぶとはぶら行くべ。此比都より三条西内府君なども
新さよ抄解を加へく。雲れ上るも講じ申よう。その
人くれ従者よ成とも逢まくへく。弱るれるれ事れ
ど蹇る病有く帯ふぶるもちり行くねば。旅の仮い之ひ
切めり。唯まれぶんくる及慶歌味して。人一くび共我よく
いをのき是を百くびせべなとうはの言ゝ面ぜちらんと
そよのくと。言へくれそ。公い家才名の山林まで及びを
収べ。且翁が志の源さを感じ。我くそい三條西実隆が筆
仕せるなれ。切相逢も富公の縁よくそと。作あるとれで。彼

翁ちく弱くさ。逢くさ庭を躍ちり。逢て跪く。今までれ
無礼死罪を免れぞと平伏をると。浪ちよ作せく恥
け上させひ。爲今官を辞し。業つの身となり。山林乃
閑味よいさくも敬をるるまうれざるふても。汝が智よ
くく源氏を楽くむ志を感ぜ。爲ありよ人ぶれあるが家
る美の里もむつまくきと思るの我。そのくくしきな
もなくぶ。追て貸てん寺ど作あれで。風を流して恩と
謝く。備もかる師恵くよ逢をるも。千家の一遇老の命
いるれ晴ぎも行ぐく。西伝寺まぐらぶいそよ幸。一
二回をらくきとやせぐ。夫くそ むの半なれ。行先くぐつき

そこらもなく。をなじ山路のたけ〻まれなる山ふかうて休息
なぐさ抱侍もせんと。箕子は上よりはるゝ〻ば翁ハ囲炉裏よむ
うゝ清澄の流を汲答よ入。小倉の松を折ぐく。梅山の菜と
飯ぐ〻ゝ。ゝもれい瀬水を汲ゝ楚行を焚ゝもまさられとと
公一入よ感〻ゝ。都の奢侈よ惑ひてかゝる深山の奥
れ居。芳人の水れゝゝよりも。尋ぐゝゝるぞ恨ゝゝると。勅恩赦
奪よ及ゞゝゝ。かゝて翁ゞゝやうハかの物行れ発端よいづ
きの御時とかゝゝるハ。いつゝゝる扱よゝ公言曰。これハ伊勢集
よいづきの御時ゝゝあるとゝん。大御息所おゝ〻まゝと書出せる
筆法まて。延喜の御時と書ゝゝ紙。おほえかゝゝ手あゝるを

れなり。翁又向紅葉ふかの老ふおそゝゝるかゝゝけるを
うゝゝもあられもと書ハいゝる事ぞ。公言曰是ハ
和文よめゝゝ記筆法まて。或紀が妙られるを不。家人既よ
賞美せり。慈円。個子。赫子。喧子といゝる。毛詩の語勢ゝ
似ゝると宮よ。又向或紀石山寺よ通夜して。中秋月。水月
を歌〻ゝ。物行れ逝向ゝゝゝをつすれぬ内よと。仏前乃
般若経を本尊よ中侍ゝ。須磨の石の色と手ゝゝゝ
武幸いゝで。公言云。河海抄れ序よ既よかゝゝゝ。古くゝゝ
ゝゝゝる事なれども。古書よいまゝゝ見事ゝゝ。翁毗ゝゝ
て収ひざる色伐歌〻。山住のあゝ翁〻さ。於の人よそゝさ

ろく事多くと。むとりこちそんべ。公の宮よ。家耶。汝をも
ゆるす事なく。汝行をりて不満れをたらうゑと問い
ゆへ。翁ども云。君い実法云まていおわせど翁が行よ事い
業と名家て就きゆるるきゆるんを。たまうんい一樹の陰の
情ばかれく。今おうゆるやうゆる事をも。かうりきうせゆ今宮
不い河海花雪ゆも。有く記しく。糸ホも稚こ時人の許
ゆてゆうゆうあうて芝人付ゆ。高家三代の考効のうち。
さぞう孫資発明やおうをうんといで。公大よ尚
感まうく。父祖之代の扶助救條の伝ゆきよあら
ざれども。今回不れ之ケ條よおゆくい。此外の発明ゆ

汝ゆ不存ありやとのゆ人で。翁ゆ云。拙れよたうよゆれい
さぞい翁ゆ頑ゆるかうゆを少く連行ゆべく。いづゆ乃
御時ゆと申ゆい長恨奇れ発句よ。唐れ玄宗の事を。漢皇重
色と申ゆるよう出ゆるのゆうん。元来相蚕い長恨奇を伴ようて
書ゆ者ゆれで。相蚕帝を玄宗よ法く。更衣を楊貴妃よ准ぜ
法。延喜ゆも相蚕の御門ゆもかくでいつゆの御時と申ゆる。
代ゆ忘なくて叶まじ。紅紫賀の者よ。そうゆうゆかくけ
あくもなど申ゆる。琴号倫子の筆法とぼゆれさまいて筆
法いをめども。文忘いけゆうゆ。芝い源氏の御心のうちう。
ゆうゆれれ分れ之乃。おそうく。御門の出事。茂かくけゆく。

冷泉院の生きあるをうらふ〳〵く義盞の御んを思ひやれば汗
ゝ出るとかく〻〻よりおひ出もれ字ゆゑてあるべし。愚案い
づなんといふよ。公大よ用にまし〳〵。先賢いまゞ発せざる
に。孫よ孫説といふべし。般若の裏へ書る事よ附ても又
私説ありやと問ひあへば。紙ウ氏事古く云伝へらるといへ
ども。一向ウ貴ひゞ〳〵。武戸弟の紙書ゞ云教よ系義
しなゞら。料紙乃用意なるうゝい條数といふべし。思ふよ釈
迦一代の蔵経ハ華厳れ大乗ハ聾唖のごゝくして。聴衆乃
耳よふゝび。阿含方等よ初りて小乗乳酢の経を説ひ。衆
生の機やゝ〳〵のひく。小乗を捨とれりひ有相の法ウ思

せる時。般若清法の経を説られく。色即是空なりと。今ま
で思せゝ有相有色ハ皆空なりと宣ふ。されで今まで
有ゝを空と説るゞ般若経なるよ。孫氏拘伝ハ寓言みゝく
爰れ深稽のさゝへのごゝく。のせきあるゝ有りけるゝて事
を設られで。空即是色の法味よて。般若のうゝをうへゝて
書和ゝ有るべゝや。色よ受ゑいづと同よ。公いよく思ロ
ゆひゝゞ。渠ゞごゝき狂夫よ法ゝ〻きく。奇のゝう文祖の名
を汚さん事ハ惜と思ゝ〻ゝられば。汝ゞ考へゆるゑ。方を用
ゆるよ似ゝう。去なゞらさゆうれ鑿説ハ。縉紳家よハ用ひぬる
なり。只徒ある一口ウよ人ゆるぬるでよゝとゝ。ゝ人ハ。翁微

笑ふ云。公今史述をうぶかみなり。堂上家より鑿説を嫌ひ
ぬと宣へども。それハ中古九芝より道喪へ上代の事のゆう
うなるうざるより云出せる事なり。久芝れあめ。ぷうう
れたるものくでくりのとんるべと。定家へさ来教まるも。
家すどよりむぬいそれを熟形なりと爭ひ久もよりなけ
きど。古書を註釈せんよハ。ぷしも義理をよく知し。他
志の意をかくるぬやうにせんこと。当一なるべし。兼良公ハ秘攻
よ。子のこれ餘の三が一よ。左傳の絳縣ハ爲を引うれる。行とそ
爲を鑿説とハ捨くまうざる。公三代のおもなきハ前ぶた。
源氏ハうまれ上ハとくく。云用の鑿説とやうづき。唯村老

野翁より。矛ハ紙れ。そて。大道ハ道ハあやまるとうよ事なうれ。匹夫
をも志を奪ハざるハ。聖人の道なり。ハ拘ハ行のうハ。姑く舍く。
天下の政ぶく諫の鼓を立。批謗ハ木を立。下民の汙を取
用ひうくるとそて承りし。今天下武家より帰して。兵久学より
ハ募ひ所分ハれ。そこそ。かく下情を蔽ひ。ものを害
ハうくん。長大ハ天下の刑罰を執ひ。かく威勢より庇
ハをあて。志をかく絆ハ。ハらしめうんと。そうるハなくハ
ハれば。公ハ面より行して。ぶぶり出ぬうとそ

九　鍛冶國助家業より託しく士を諷ぜ

河内守國助は。代〻は名うて。摂陽に住し。近世の上作。彼地
にては井上真改津田助廣に肩を比ぶる名譽なり。第四代
目は國助は幼くして父は國助に代て奥義を習ひ始め。故に
小林伊勢守國輝に打ち勝て。能婿乃術を学ぶ。國輝は初代
河内守が弟子にて。二代目國助と兄弟にて。別家
し有れば。當國助を。子弟は。殺等しに成
に。國助も深切に学ひしゆへ。大方は事芸は相傳せしゆど。
湯加減の一大事は唯受一人の秘傳なれば。若く越をぶる
からんと。唯自得発明の位ならんと。國助も極く心
を用ゐれども。父祖の位に似べくもなく。國輝も傳もう
ひがく。爰に学ぶる事十年あまりに。急一筋紙おりひお
るは。國輝一人の女をもりてる。貌醜陋にして人の忌むべき
女にはなれども。心ぶ人いきぶりみ〻く。父母に つの
ゆるまく。國輝は涙く。是れぞ紙を作る者と。
婚姻は中とあらば。分して外なるべし。彼湯加減も傳授
をべしと。婚姻を求めいひ出せしに。彼女が醜き事は親
も知れる所なり。さるに。國輝家の女。高き婚
かゝ紀を結ぶる所。國助が志金に師資は義を重ぶるに
んと。大に怒りて。頑堅し。婚儀も調へく。年月をか
さねて。往来されども。伴の一大事は。高いひあぐさるき

もなく。國輝が氣象元来一若なるものなれば。此方より邪
ひて却て機嫌よ省き。向後とも誤るべしとおりひ。國助も
あまりよせんかさなく妻よ伝へ〳〵。汝をむこ〳〵妻と〳〵
結る事。全く餘れ義なるべ。あうく〳〵此事なりいひて
ら。お志を為んといひられば。妻も流石よ鍛工の女なれば其
道よ切なるを感じ。彼らい家よ一業あり。老父母の一刀
を鍛練し。湯をはさんとなる刻をうかひ。急よ童が大
病発せるよと告なり。取物も手敢ず来りなんを時機を
うかひたまり。湯加減を知らん事必定せり。遂て父乃
答あるとも。それいかさまよ徒べきといひしらい。是家上の

刀鍛冶の事あるく。國助も合槌よ行く鍛へ。湯をはさ
さんとなる時。國助ら小厠大息切く走り来り。家童よ急よ
病発して絶入しあるらと告しらい。國輝大よ驚き。疾行く
走るべ。河内もいざといひさぐら。側よ在り一桶の水玉彼湯
舟よ井ど入く走り出さら。國助は辞を入く。謀やすき業
としてあらしよ。國輝は國助ら家よ走りこれば。女は常
れ弱なれど。再び驚き所へいんと問よ。ふく〳〵のらい。今は
つまび伝るうちぞ。國助も走り来りく。先生の業よ切なる。史
急の切よ際して。大事を忽よせざる不。誅よ無孔の鐵槌企く

及ばざるべと涙を流し。遥宅して。奇謀計の罪死に当まり
と謝せりは。国輝も甚だ感慨し。父祖以来の知音といひ。婚
姻の間れ事仰ぎ行むべきなれども。今や及びがたん。古も
是を歎ひく。序賀を打為されるものを。小縁に依
る事うしあるべれば深くおしえぬ。今は京の深志を足
面仕まべ。以上は相伴せむべきして。委く伝へる果敢その
ほうは。国輝国恥一双の名剣を献じ奉せるして。一日国恥の
許へ或国使れ来りて。志ろしめれ刀剣献じるとの事を属せる
序行事も苦さ負はかしうく。もさ代はおろくるゲ中
ま。献治は別して使事まよりぬ。苦の名代は奴隷をえて
は自ら鞭を割きて追るなどもあるよ。今は
人を探出せども太猫もおそれを。剰さへ過をるてはは
ひをしおさしむるうこ成るは惜さるをいしらば国
恥温和の者なれども。家業成繁られとや思ん。又た
理の国をやうひんそれは作るそひつる。是なるに似る
はなら。兵書に伝へ碑に刻るをもて誅ちしめ
大なる誤を伝へ。国振治の術は五行の精性を撰ぶ人の
神魂をこめて振る事みて。奸邪を破り朝敵を亡し。
剣をとりて。四海安寧天下太平ちしめん事を祈り帯る
人の徳を助け。害を除く寶器ちん事を設さ。千子村正

へ既に名作なれども。心裏れ悪念よりて出でれ武将に害
有り。子歳に名を下せり。近代加列の勝国勝家へ源に為る毎
に陀羅尼を誦し。剣を常に人武運長久なる事を
祈るべし。浮屠れ呪をなせるへ神国相伝れ源治に惜け
きなり。志へ漢高れ三尺乃剣。四百年
の基業を開き。日本武れ尊へ草薙の剣をもて東夷を征
せ。是名剣れ徳のなりといで。安徳帝西海に没しぬに
ぬ。寶剣何ぞ知けむ。義経が首に懸ざる。凡剣へ
人に依て殺活をなす。人れ徳と。剣れ徳合るぬへ四百
年れ基をも開く。東夷をも征すべし。為徳の人に
あへ。剣徳自ら開くべし。鏡へ英人のために発せられ醜妖
れらに惜まるるも。それを自ら鞘を離れ
て。妖物を退るべし。それ乃人の古の名源治
を。幻術者とぞ。芝人のよるや。扨又今れ源治の刀剣
れ古に及ばぬといふ事。抱毎未れ裏微淺為へ論り
及びなぐら。上古れ淳厚の世風へ姑く舎く。中古戦国乃
世も陣刃に除に為りて。唯彫むべきものへ腰間の二刀より
外なし。国の興廃。家れ存亡。身れ生死乃別る変なれば。刀
剣れらに金銀を惜まば力を尽して命をるべに。源
治も費用の倹約を思へ。精に精を加へて打出せば。

自ら絶世れ劔も業ぬ。今い治平に怠ぢく。腰刀も奢
侈の贅物れ拵よ美て。恐命乃要器といおもらぬ人多く。
甚上古代れ上作れ刀劔多く拭きて。今新よ二十片と
十片を費しく鍛つんもらい五片七片ようてあるを求
めん事矣利ありといよ了簡なれば。鍛冶いよく鍛
煉乃教もおく。さ毋く おとても價金を混らき費
用を省きば。事れ足ざるけこふて。公神の十分を尽し
強しさるも累世の者い家名を汚さん事を恥きば。
粉骨を砕き。丹誠を尽し鍛る也よ。五片七片れ費用
ようてはとく二十片三十片れ利力をおおしけるもも
あるべ。なぜ古れ作者よ恥る事けらんや。只眼らく治
平れ人の。金銀を惜みて。空く老ぶ後
らむる事をて。うく鍛冶けるべ。君れ臣誠
仕ふる道をひるる人よ。道を行らむる事れ。拵
果さ也。唯有まれ毎事給人ようてるよ合せるよ也
ふ。仕癖のみよ泥みて。新よ仁政を発せるもなく。
ただよ奸邪れ者の。弁佞よ惑されく。大なる苛虐を
行ひあるもあるべなげらく。仕ふる人も道よ志
うときい只利慾よのみ耽りく。徳ある役を忘くさ
なれば。治金れ道を勤る我者れ。鍛冶よ劣

きる物さ志ゑ〻く。農工の上ゑ〻ハ士とハいひ難し。
瀧を流していひしらべ。彼士ハ吾を振て出行ぬ。後年
法玉ハ名家の風治を関東ゑ下るまで。千分れ風流を余ぜ
きゝ。道ある御代の御恵みて。治ゑ乱をわすれた
まひざる。武徳なりと。万民感し奉りしゑや

新斎夜語巻之五大尾

筆ハ物ゑ〻ゑ世。枝ハ物
ハ〻ゑ〻ゑ楽の色とわゑ〻ゑ。硯乃
海ゑ毋ハ物ゑ〻も。綱ゑ行ゑ〻
ゑ〻ゑ底ゑ〻ゑ〻ゑ事ハ
ハ。ゑ〻ゑ〻ゑ書ハ物ゑ〻ゑ〻ゑ
ゑ〻ゑハ物。檀の行ゑ〻ハ汚ゑ
ゑ〻ゑ〻ゑ。或ハ東路乃
ゑ〻ゑ楽ハ。世ゑ〻の義ゑ〻鄙ハ
ハ〻ゑ〻。ゑ〻ハ淀毋ゑ揖ゑ〻

[illegible]浮麻の藤人乃。皋[illegible]おか
[illegible]きと浮とる云のくびゝ[illegible]
い、つけ[illegible]。この須新[illegible]
[illegible]ものゝ所[illegible]。匱乃
底より[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
夏の[illegible]

[illegible]鶏[illegible]。この[illegible]
[illegible]
乃[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

續新齋夜語

安永四乙未年正月吉日

皇都書林　東都書林　浪華書林

堀川綾小路下ル町　錢屋莊兵衛
日本橋南壹丁目　須原屋茂兵衛
心齋橋筋博労町　糸屋源助
同　塩町　田原屋平兵衛　合刻

嗣出

男女教訓書籍目錄　浪花書林　抱玉軒

大和為言錄　教訓情理を繪ら語　平子法入　今ゝ冊　荻井懐斎著

繪本實語教　平子法入　少尾吾坑斎画

十訓抄　古ていろ乃ゝ乃ゝ　おゝ人となるべき教　平子法入　全十冊

和漢朗詠集　徹書紀筆　全三冊

婦人問答言　女子氏おゝ人を　平子法入　全四冊

庭訓往來　健部信胤筆　全一冊

神國女訓抄　平子法入　山口日向守著　全一冊

新齋夜語　ゝの法を中院故事　あらを　平子法入　全五冊

女教探文章　長友玄策　全一冊

教訓仮名歌　荻井懐斎著　全一冊　児を女教となるべきを　あつめて和歌とす

安永三年甲午正月吉日　大坂　心齋橋塩町　田原平兵衛板